

環境リスク学

中西 準子・著



《評者》吉田 光宏

(ジャーナリスト)

日本評論社＝(03)3987)8621、
四六判、251頁、1890円。

スマトラ沖地震の津波のような
天災、病気など種々雑多のリスク
の中で生きていくわれわれは、メ
ディアや研究者が「オオカミが来
るぞ」と騒げば、不安をかき立て
られてしまう。だが著者はそんな
研究者ではない。冷静にファクト
(事実)を検証し、「どれだけ危な
いか」を示す物差しを用意して
くれた。

日米で大きな問題となっている
牛海綿状脳症(BSE)は、米國
が全頭検査で0・01人弱の命を
救うのに2000億円かかる。米
國も日本も理論的には全頭検査は
必要ない、という。リスクの大き
さを明らかにし、対策を提示する
のが行政の責任だとする。

ダイオキシンも空騒ぎだった。
旧厚生省が「85%は生活系のごみ
焼却場から排出されている」と発
表したが、著者は水田除草剤C
NP(クロロニトロフェン)に含
まれていた有害なダイオキシン成

事実から合理的「危うさ」見抜く

分が主因であることを突き止め
た。
環境ホルモンや貧困のリスクな
ど、さまざまなリスクも取り上げ
ている。

明快な理論と事実の裏付けによ
って到達した「環境リスク学」。
自分たちの立場に固執して責任あ
る対応をしない消費者運動、研究
者や行政をばっさり切り捨てる。
尻馬に乗るメディアも反省すべ
し。

著者がこれまで闘ってきたの
は、科学を身勝手に操ろうとする
「人間に潜むリスク」かもしれない。

版を重ねている本書には、批判
や疑問も多く寄せられるようだ。
著者は自身のホームページで補足
説明するなど、真摯(しんし)な
研究者の態度を貫く。本書を讀ま
ずに環境問題という「不安の海」
を泳ごうとすれば、リスクは非常
に大きいといえる。